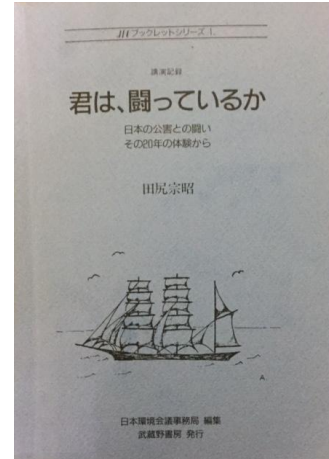


君は、闘っているか

過去のレポートを読み返すことがある。表題のレポートもその一つである。多くの人に読んでもらいたいので、すこし修正して紹介したい。

写真は田尻宗昭さんが1987年に一橋大学で行った特別講義の「講演記録」である。日本環境会議事務局編集で1992年に武蔵野書房から出版。この本を読むと、いつも「君は、闘っているか」と田尻さんからハッパをかけられる。90分の講義のあと、教室一杯の学生たちの目が、感動の涙でうるんでいたという。久しぶりに読んで、また感動した。感動の言葉の一部を伝えたい。



（四日市の経験から） 「誰か一人でも、必死になって球を投げ続ければ、必ず歴史は変わる、ということです。私は、こういう教訓を得ました。」

「国がどんなに法律を立派に改正しても、それはただの活字だということなんです。本当にその活字が生きたものになるためには、現場で人間が必死になって闘わなければ、それは実のあるものにはならないということです。」

「今や公害・環境問題は、特殊な専門家がやればいいんだという問題ではなくなっているんです。私たち一人ひとりが、我々自身の問題として取り組まなければならない。そのことを、私は改めて強調しておきたいと思います。」

「私は、20年間、公害とつきあってきました。一人の海の男が、何も知らないで、公害の現場からいろんなことを教えてもらいました。しかし実感としては、暗いトンネルの中を懐中電燈も持たずに、手探りで、何の展望も持たずに歩み続けたんだなあ、という感じがします。そしてようやく、少し出口が見えるようになってきたような気がします。それは一体なんだろうか。それは、いろんな現場で手に入れた人間の絆です。私は、幸せだと思うんです。」

「おそらく皆さんも、これからの長い人生の中で、何度か、崖っぷちに立たされるだろうと思います。その千尋の谷を迎えた時に、どう考えても、その方向が正しいと思うならば、どうか目をつぶって一歩踏み出してほしい。その一歩が、必ず皆さんを救うことがある。人間の小さな頭では計算できない、数字を越えたエネルギーとドラマを生むことがある。」

(2021年5月4日)